

カトリック 新潟教区報

第226号

カトリック新潟教区

編集発行人 教区報編集部

〒951-8106 新潟市東大畑通1-656

TEL 025-222-7457

FAX 025-222-7467

2003(平成15)年6月29日発行

10月12・13日に新潟で教区信徒大会

大聖年から三年目の今年十月十二日(日)と十三日(体育の日)の二日間にわたり、司教座聖堂と新潟カトリックセンターを会場に、三年に一度の新潟教区信徒大会が開かれる。

司教評議会から

第2日(10月13日)
10:00～10:30 教区信徒使徒職協議会総会
10:30～11:50 共祭ミサ
主司式 司教様 鎌田神父様
説教 鎌田神父様
11:50 閉会式
12:00 解散

第1日(10月12日)
14:00～15:00 受付
開会式
オリエンテーション
15:30～16:30 基調講話
16:30～17:30 各地区からの感想発表(5名)
17:30～17:40 休憩
17:40～18:50 タベの共祭ミサ(主日のミサ)
18:50～19:00 休憩
19:00～21:00 交歓夕食会

ことしの大会のテーマは「信徒の霊性(サブテーマ)生活の場で、働きの場で信仰をどう生

新潟教区司教評議会の三十七回総会が三月二十四、二十五の両日開かれた。議題と内容は次の通り。

一、新潟教区大会について

(別稿参照)

教区協の斉藤清会長から大会のスケジュール案が示され、それに基づいて意見が出された。

二、教区報について

しばらく休刊していたが、六月に発行し、今後は十一月と四

のほうに専念しなければなりません。

先日、新潟教区司教団の集まりがありました。その研究テーマは、「司教不在のときの集会祭儀」でした。これは司教にしかできない「聖体祭儀」とは違

小教区の再編や

共同司牧のあり方も探る

「生きるか」で、佐藤敬一司教の基調講話で開幕する。すでに教区信徒大会の開催要

月に発行することになった。

・教区協役員から窓口になってもらえる地区の青年を指名してもらい、知らせてほしい。

各小教区で発行される「教会報」を司教館に送ってもらいたい、という要請があった。

三、新潟教区司祭の集いについて

(記事参照)

六月二日(月)から三日(火)に「主日の集会祭儀と病人の聖体拝領の奉仕のあり方や奉仕者

去年、共同祈願として次の祈りをお願いしました。「主よ、わたしをあなたの宣教の道具にしてください。あなたからいただいた愛と慰めを、きょう出会うすべての人にもたらすことができようように」。教区報

はだれにでもできる仕事ではありませんが、福音宣教はわたしたち一人ひとりの責任です。教区報が福音宣教の強い刺激になることを信じています。

敬一

面倒な教区報の仕事をお引き受けくださった皆さんに心から感謝いたします。

綱と参加申込票は各小教区に配付されており、大会実行委員会では青年層をはじめ信徒多数の参加を呼びかけている。申し込みの締め切りは七月十二日。

の養成」をテーマに、さいたま教区矢吹貞人終身助祭を講師に招いて開かれることになった。

四、中学生錬成会について

八月八日(金)から十日(日)に鳥海山家族旅行村を会場に開かれる。十日には酒田教会でミサを行う予定。

五、四旬節愛の献金について

期間中にアフガンなどの問題が起こるので達成したことはないが、毎年一億円を目標に集めており、その七割を海外援助に、残りの三割を国内援助に充てることにしているが、国内援助について申請がほとんどない状態とのことで、どのようなものが対象になるのかについての質疑が行われた。

六、小教区再編、共同司牧に関する意見等

議題にはなかったが、各地区の動きの紹介の中で、「小教区再編、共同司牧に関して、検討すべきではないか」という発言をきっかけに、司祭の側からの発想ではなく、信徒の側から、「霊的なニードにどう応えるか」という発想が必要だ、次はこれについてのアンケートを採るべきだ、などの意見が出され

た。

七、教区会計報告と話し合い

例年、春の総会で教区の会計報告が行われるが、今年は、全体の収支ばかりではなく、園長給寄付や新発田・新潟地区の司祭活動負担金の収入とそこから支払われる司祭の給与の収支、一粒会費と神学生養成費の収支についても報告され、それを元にした話し合いも行われた。(全体の収支については、「会計報告」の記事参照)

ア、園長給寄付や司祭活動負担金と司祭給与について

司祭の減少や高齢化で、幼稚園の園長をする司祭が減ったことや、園児の減少で出来ないところも出てきて園長給寄付が減る傾向にあり、負担金が増え横ばいであること、幼稚園に関わらない司祭が増加したこともあって、辛うじて給与が賄えているが、一人でも増えればたちまち足りなくなってしまう現状が報告された。

イ、一粒会費と神学生養成費について

一粒会費は、現在、神学生が一人だけなので神学生養成費を支払っても残る状態だが、一般会計が苦しい年には残るはずのお金までがそちらに回ってしまい、残らない時もある。毎年、収支によって、繰り越し分を別に積み立て、一般会計に回らないようにしたい。

八、各地区の動きや予定について

各地区の十一月以降の報告、今年度の予定について情報交換を行った。

信徒の時代

新潟司教

佐藤

敬一

には二つの特別養護老人施設があります。しかし、改めて驚かされたのは、叙階された司祭ではなくてもできることは多いということです。洗礼の恵み、堅信の恵みは本当に大きいのです。私たちを通して働かれる聖霊のお力を信じましょう。

私は新潟に赴任した当時からずっと、教区報の編集は司祭の仕事でした。能力のある司祭がいたから、続けることができたのでしよう。しかし、時代は変わりました。司祭が「なんで

「教区報」の再発行を本当にうれしく思います。再発行されることにより、その編集が司祭の手を離れて信徒の手に移ったことのほうが私には大きな喜びです。これこそ「時のしるし」だと思います。第二ヴァチカン公会議のころから言われて来た「信徒の時代」が始まっていることが、新潟教区でもはっきり見えてきました。

司祭の 終身助祭を招き

集会司式者の養成を協議

ことしの教区司祭の集いは六月二、三日、新潟県の胎内パークホテルで催された。

昨年初めのアンケートの中で、司祭の減少や信徒も含めての高齢化の問題が数多く取り上げられていたことから、十五年度の教区司祭の集いは、それをふまえて、表記のテーマで、さいたま教区(浦和市がさいたま市になったことに伴い、教区の名称もさいたま教区に変更)の終身助祭第一号の矢吹貞人助祭を講師に招いて行われた。すでに行われている小教区もあり、近い将来にはどの小教区でも取り組んで行くべき課題でもあることから、講師の話に真剣に耳

を傾け、二日目の教区での取り組みについても活発に意見が交わされた。

矢吹助祭によると、当時の浦和教区では長い間、一人も神学生が出ない状態が続き、追いつめられた状況で、みことばの祭儀のやり方の検討や奉仕者の養成に取り組み、規範版と呼ばれる二つの形式(一つは教会の祈りを入れたもの)が作られた。作るに当たっては「ミサとは違うことを意識させ、奉仕者がミニ司祭にならないように」ということを心がけ、そのためにも「一人ではなく、複数での奉仕が望ましい」と強調していた。さいたま教区では、その後、

神学生が毎年のように誕生し、司祭が増えてきて、みことばの祭儀を必要とする小教区は減ってきているが、急に司祭が入院して取り組まざるを得なくなるケースもあったことが紹介され、「真剣に祭儀のやり方や奉仕者の養成に取り組むことで、さいたま教区のように神学生も出てくるかも知れない」という励ましもあった。

奉仕者の養成についての話し合いでは、「教区として研修会を開催しても、参加できる人が限られてしまうので、地区ごとに開催することが適当である」という意見が大勢を占め、開催するに当たって「養成のガイドライン」を示してほしいという要望に添って、ガイドライン作りが行われることになった。「どんな講師を招いても集い

が終わればそれで終わってしまう」という意見からアンケートが採られることになったが、今回の集いは、「ガイドライン作り」から始まって、明日につながるものになりそうに思われる。

司祭異動

▽白根教会主任を兼任(花園教会主任、佐渡教会兼任) 高敷修
▽佐渡教会主任を兼任(教区事務局長、白根教会兼任) 川崎久雄
▽新潟地区協力司祭(長岡表町、福住教会協力司祭) 三崎良次「4月1日付」

◆転出 研修のためスペインへ(鳥屋野教会主任) ホセ・ルイス・マリニ
高松教区▽鳥屋野教会助任兼任(花園教会助任) フェルナンド
高松教区(鳥屋野教会主任は佐藤司教)「5月

5日付」
▽秋田教会助任(日本語研修) マルチヌス・オマーン
神言会「6月8日付」

よろしく

高田教会助任



フランシスコ・ハビエル

私はスペインのサラマンカという町で三十一年前に生まれました。兄弟は八人、私は上から三番目です。私の趣味は読書、ギター、散歩、バスケット・ボール、車の運転、そしてチーズを食べることです。
私はカトリック信者の家族の

秋田教会 河村師が帰来

一昨年から体調を崩されていた秋田教会助任司祭(神言修道会司祭) 河村真一師が、五月三



しめやかに営まれた河村師の葬儀ミサ

十一日、急性肺炎のため秋田市の中通リハビリティーション病院で帰天された。八十歳。六月二日に通夜、三日に葬儀ミサと告

いつも弱者に愛のまなざし

別式が秋田教会で執り行われた。

司祭叙階から四十七年の師は、そのうち二十八年間を秋田県内の各教会で司牧された。「第十八回秋田地区信徒のつどい」に出席のため訪秋中の佐藤

敬一司教も臨終に立ち会われ、また「信徒のつどい」当日は、全県の司祭、信徒が、生前の執務室に安置された河村師にお別れするという、主の恵みあふれるお計らいの一日となった。

河村師は一九二三年東京生ま

れ。五〇年初誓願宣立、五五年終生誓願宣立、五六年司祭叙階。六七年新潟教区本荘教会主任司祭、六九年同毛馬内教会主任司祭、七二年長崎・聖ルドヴィコ神学院院長、七八年名古屋教区多治見教会主任司祭および多治見修道院院長(兼任)、

当時幼稚園の園長もされていたので、園児たちにおじいちゃんと呼ばれ、通ってくる子供たちひとりひとりと握手をしては「よく来たね、おはよう」「気をつけて帰ってね」と、声かけを欠かさなかったという。「叙階されてから、弱い立場に

ある病人、お年寄り、子供へ常に目を注がれていました」と桃田師(土崎教会)は長崎で一緒だった時代を振り返る。

また「柔和で謙遜のうちにあって、どんな時も毎日きちんと聖務日課をこなされ、司祭のお手本でした」と話される飯野師(大館・鹿角教会)は「：決められた道を走り通し、信仰を守り抜いた(テモテへの手紙二)方でした」と涙される。

秋田教会の信徒らは「新潟教区のひとつ、秋田の土地、秋田の人々をこよなく愛しておられた祈りの師は、これからも信仰生活を続ける人々の中で心の支えとなってくださるだろう」と亡き師をしのんでいる。

中で育ちました。十七年前に母に励まされて、私の小教区の主任司祭の下で新求道期間の道に入りました。その時から私の人生が変わってきました。少しずつ神のみに導かれて司祭への召し出しを感じました。その当時の主任司祭に言って、サラマンカのポンチフィシアの大学(教会の大学)で神学の勉強が始まりました。

一年たつてから、高松教区でREDEMPTORIS MATRERという教区立国際宣教師学院が始まりましたので、私はサラマンカの司教様からそこに派遣されました。高松で求道期間の道を歩み続けました。毎週二回西条教会に行つて、共同体の兄弟と一緒にみことばを聞いて、信仰に導かれて来ました。私のために大きな恵みでした。

日本に来てから十二年たちました。いろいろありましたが全部のことを思い出したら、やっぱり神様は大きい、不思議なわざを私に行われました。苦しい時がありましたし、喜びの時もありました。

去年の五月の二十六日、高松で深堀司教様により司祭に叙階されました。半年間は今治教会に助任司祭として任命されました。神様に感謝の心でいっぱいです。しばらく、短かったけれどもその間、深く神様の愛を感じました。今年の一月二十八日から新潟教区に派遣されました。その日から高田教会助任司祭として任命されました。高田教会では神様の力と慰めを味わっています。私のために祈り下さい。

新緑の中で大会

◇長岡地区◇

妙高教会40周年も祝う



晴れわたった高原の新緑の中で奉げられた地区大会のミサ。手作りの白樺の十字架がひとときわ信仰心を呼びさました

聖霊降臨の主日の六月八日、晴れわたった青空のもと、新潟県妙高高原町の大自然の中で、長岡地区信徒大会が開催された。今回の大会テーマは、今年が聖クララ帰天七百五十周年でもあり、また妙高教会の創立四十周年の記念大会とも相まって、「身近に触れる神のみわざ―聖クララ・聖フランシスコとともに、自然を通して神様に感謝―」とした。

午前九時から妙高教会で受け付けを開始、聖堂で「雪の聖母への祈り」を順次唱え、大会会場である同町赤倉の森林公園へ移動した。森林公園脇の広場では、妙高教会信徒制作の大きな白樺の十字架と祭壇が用意され、妙高山の頂きを間近に望む、緑の鮮やかな芝生の上でのミサとなった。

午前十時半、ヴェニ・クレアトルの鐘の音とともに佐藤司教と六人の地区司祭共同司式のミサが始まり、荘重なオルガン伴奏に伴われ、長岡表町、長岡福住、十日町、柏崎、高田、直江津、糸魚川、そして地元妙高の各教会から集まった約二百人の信徒の祈りと歌声が周りの木々にこだました。

ミサ後は全員でのアガペ（会食）。森林公園の木陰でそれぞれグループに分かれ昼食を広げ、妙高教会信徒の丹精こめた「たけのこ汁」が全員にたっぷりとふるまわれた。妙高の信徒は、このために朝五時から山へたけのこを採りに入ったと、一同感謝。昼食後の午後一時から芝生の上で、地区信徒使徒職協議会の総会が開かれ、妙高と上越の地で医療や福祉に活躍された渡辺ハルさんに地区協議会長から感謝状が贈られた。地区協議会事務局長の司会で前年度の活動経過、そして今年度の活動予定等が報告され、十月の教区大会への参加も促された。

（町屋英雄長岡地区信徒使徒職協議会長）

神言修道会は一九〇七年に來日し、現在は主に秋田県・愛知県・岐阜県、東京都、長崎県の二十小教区と、名古屋、長崎で南山学園を通じて宣教活動を行っている。日本管区には百十五人（ことし三月九日現在）の終生誓願会員が在籍。世界には

神言会創立
などの2師
今秋ローマで列聖

教皇ヨハネ・パウロ二世は三月七日、新潟教区（秋田県）でも活動している神言修道会や聖霊奉侍布教修道女会（聖霊会）など三つの修道会を創立した福者アーノルド・ヤンセン司祭と、神言修道会の最初の宣教師である福者ヨゼフ・フライナデメツ司祭の列聖を宣言した。列聖式は十月五日にバチカンで行われる。日本における列聖祝賀行事は二〇〇四年一月十二日に、神言修道会と聖霊奉侍布教修道女会の共催で、名古屋市で行われる予定。

有期誓願以上の会員が六千二十九人在籍し、六十七の国と地域で活動している。

聖霊奉侍布教修道女会（聖霊会）は一九〇八年に來日。秋田市に女子教育のための学校を開設（現聖霊学園）した。現在は秋田県、東京都、愛知県における教育事業、愛知県、石川県に

100周年の 鶴岡教会



310本のパイプを
3群に分けて「三位
一体」を表現した、
ことし3月導入のパ
イプオルガン

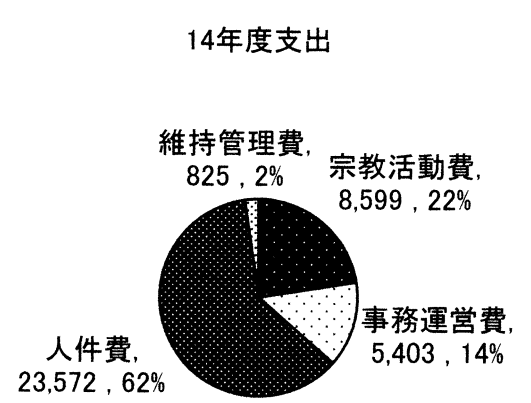
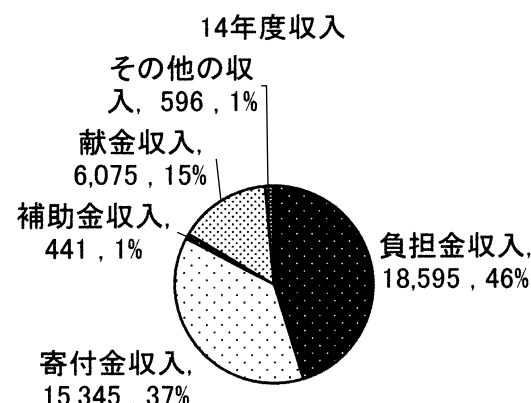
オルガンを新設 11月に記念ミサ

山形県の鶴岡教会聖堂が、一九〇三年（明治三十六年）に献堂されて今年百周年を迎える。鶴岡市の観光マップにも載り、年間六千人を超える来堂者があるこのバジリカ型ロマネスク様式の木造建築は、国の重要文化財に指定されて既に二十年を超えた。

同教会では三年前に百周年記念実行委員会を組織した。風雪に耐えた百年間の天主堂（聖堂）を贅えるとともに、永い歳月にわたって守ってきた聖職者・信徒や、鶴岡市のシンボル

厳しさ続く 教区財政

教区の十四年度一般会計は、収入が四千四百五十二千円、支出が三千八百三十九万九千円で全体の収支としては二百六十五万三千円の黒字だが、一粒会費から神学生養成費を引いた残額を積み立てることを考えると、実質は百六十一万二千円の黒字ということになる。



粒会費が減少しており、十四年度は園長給寄付の増加と、司祭

の人件費の減少で辛うじて採算が取れた形になっており、今ま

では司祭の給与を園長給寄付に頼ってきたが、それが危うい状況にあることがうかがえる。小教区会計では、指定献金の減少も目立っている。小教区の苦しい台所事情が、そのまま教区の会計にも反映する形と言える。

司祭評議会では、合わせて積立保険料を除く現金・預金も四十七百万円程度しかないことも報告され、「本部には、そんなにお金はなくてもよい」という意見も出されたが、多くの司祭は、あまりの少なさに驚いた様子だった。

三つ目はことし十一月二、三の両日、鶴岡教会出身の信徒・聖職者や縁のあった方々、他の教会からの参列者を迎えて盛大に感謝ミサを捧げる。

さらに十一月二日に聖堂前広場での野外コンサート「小坂忠ゴスペルコンサート」の開催準備をすすめている。

新潟司教区統計

(2002年12月31日現在)

(教区人口比: 0.16%)

1. 概 況

面積.....33,516km² 信者総数.....7,700人
人口.....4,873,790人 求道者.....94人

2. 人員構成

司教区司教.....1 聖霊奉侍布教修道女会 邦人.....10
邦人.....15 外国人.....2
助祭 邦人.....1 聖心の布教姉妹会 邦人.....65
神言会 邦人.....6 マリアの宣教師 フランシスコ修道会 邦人.....3
外国人.....5 ナミュール・ノートルダム修道女会 邦人.....5
フランシスコ会員 外国人.....5 オタワ愛徳修道女会 邦人.....3
イエズス・マリアの聖心会員 邦人.....2 外国人.....1
神助学 邦人.....1 聖クララ会 邦人.....9
邦人.....1 志願者 邦人.....1
邦人.....1 聖母カテキスタ会(在俗) 邦人.....14

3. 事業

小巡教回教教会.....33 幼稚園.....28
子修道院.....3 園児数.....3,281
会福社事業.....5 女子女子中學校.....2
老人社区.....10 生徒数.....166
宿泊を伴う利用者数.....3 女子高等學校.....2
その他の老人福祉事業.....13 女子短期大學.....2
宿泊を伴う利用者数.....3,190 学生数.....683
宿泊を伴わない(年間のべ人数).....27,245 児童福祉事業.....7
その他の福祉事業.....1 園児数(年間のべ人数).....162,704
宿泊を伴う利用者数.....3,285 宿泊を伴う利用者数.....70
その他の児童福祉事業.....6
宿泊を伴う利用者数.....329

4. 移動

教区内.....11 転入.....13 死亡.....63
教区外.....39 転出.....50
その他.....18 他.....6

教会名	信徒数	洗礼		堅信	結婚	求道者
		幼児	成人			
青島山	224	1	0	0	6	3
亀田	68	0	0	0	0	0
白根	27	0	0	0	0	0
寺尾	178	1	0	0	3	9
新花	885	4	5	2	10	9
鳥屋	543	2	1	0	5	0
佐野	64	0	0	3	0	3
渡	77	0	0	0	0	1
新潟地区計	2,066	8	6	5	24	25
加茂	30	0	0	0	0	0
三井	125	0	0	0	1	3
新発	273	3	1	0	0	1
新見	40	0	0	1	0	0
津(村松)	146	0	1	0	1	1
附	140	0	2	3	0	0
新発田地区計	754	3	4	4	2	5
糸魚川	166	0	2	10	1	2
柏崎	429	4	9	0	3	11
高田(妙高)	758	14	13	9	15	11
十日町	109	2	0	0	0	0
直江津	172	1	1	0	0	1
長岡表町	248	5	4	0	9	5
長岡福住	227	2	0	0	1	12
長岡地区計	2,109	28	29	19	29	42
新潟県合	4,929	39	39	28	55	72
酒田	62	0	0	0	0	1
鶴岡	195	14	6	0	19	1
山形	452	2	2	1	4	8
米沢	111	0	0	0	1	0
長井	13	0	1	0	0	0
山形地区計	833	16	9	1	24	10
秋田	995	3	4	3	4	5
大館	59	3	0	0	2	1
鹿角	61	0	0	0	0	0
土崎	384	1	4	0	1	2
能代	72	0	0	0	0	1
本庄	44	0	0	0	0	1
横手	172	1	0	0	0	2
秋田地区計	1,787	8	8	3	7	12
新潟教区計	7,549	63	56	32	86	94
聖職者・信徒総数	7,700	聖職者数(海外派遣司祭1名)151名+一般信徒7,549名				

司教から表彰される
山崎さん(左)



母子支援施設「みこころ荘」

社会福祉法人フランシスコ第三会マリア園(理事長・佐藤敬一司教)が運営する新潟県上越市の「みこころ荘」の創立五十年記念式典が三月二十一日、所在地の高田教会で行われ、来賓、関係者など約六十人が出席した。

「みこころ荘」は五十六年前の昭和二十二年、子供を抱え戦争で夫を亡くした女性や、戦いで家を失った家族、外国からの引き揚げ者などに、高田教会裏手の託児所・マリア園(現マリア愛児園)の空き部屋を無償で提供して始まった。

昭和三十二年には児童福祉法

祝辞を述べる木浦上越市長



創立50周年祝う

高田

九人が入所している。式典で佐藤司教は「大勢の温かいご支援、励ましがなければ今日まで続けてくることは難しかった」「利用者の苦しさ、悲しさを共感しながら喜びを感じて継続したい」と、感謝の気持ちを述べた。

国内カトリックで唯一
みこころ荘運営のマリオ師
今やかけ込み寺の役割も

高田教会を中心として、福祉や教育に関する施設が四つあります。それらの建物は教会を囲むように建てられています。施設そのものが、それぞれの時代の社会的ニーズに応じて教会が設立したものです。

来賓の木浦上越市長は「母子生活支援施設は新潟県内に六カ所あるがドメスティック・バイオレンス(夫からの暴力)による母子の緊急一時保護ができる施設は「みこころ荘」だけ。これからも信頼できる母子支援施設として歩んでほしい」と期待を述べた。

レモニーとなりました。しかし、入所者のプライバシーやデリケートな問題を抱えていたもので、目立たないようにしました。創始者のエンリコ神父様をはじめ、長岡地区のフランシスコ会の神父様たちが五十年の間、理事長や寮長および指導員などの形でこの施設に携わってきましたが、十数年前から運営が信徒の手に委ねられるようになりました。そして当日、法人の理事長である佐藤司教様から、長年法人の事務長として勤められた在任フランシスコ会員の山崎孝太郎さんと矢作茂雄さんに感謝状が贈られました。さらに、現職員である寮長の古澤哲男さんと職員数人が勤続表彰を受けました。

この施設の特徴は、木浦上越市長が祝辞の中で話されたように、新潟県において「みこころ荘」は母子生活支援施設として、唯一緊急一時保護の指定施設です。また、日本全国のカトリック教会で、小教区がこのような施設を運営するのは高田教会だけです。建物として、同じ屋根の下で保育園(一階)と母子生活支援施設(二、三階)が同居し、隣にカトリック幼稚園と特別養護老人ホームが隣接し老若男女が元気に挨拶を交わしています。

この祝いを機に、聖クララ会の修道女たちの祈りに支えられて、高田小教区がイエス様を中心として、福音宣教をはじめ、福祉や教育事業をさらに発展させて行こうと決意を新たにしています。